

ロシアと朝鮮

ナタリア・バジャノワ

1. 過去の遺産

朝鮮半島は、皇帝アレクサンドル 2 世が 1860 年に「隠者の王国 (отшельническое королевство)」と国境を接していた沿海地方を帝国に併合した後に、ロシアの視界に入った。その時以来、ロシアは様々な動機や多様な形で、この極東民族の支配をめぐる大国（日本、中国、米国）間の闘争に参加した。クレムリンの朝鮮半島に対する積極的姿勢は周期的に弱くなったが、のちにロシアは倍増されたエネルギーをもって再び朝鮮情勢にのめり込むことになった。

第 2 次世界大戦終結まで、ソ連は朝鮮において、自国の安全保障を確保することや共産主義陣営の勢力圏拡大、伝統的なロシアの大国主義的野望を満たすという 3 つの基本的な目的を追求した。ファシスト・ドイツとの血生臭い壊滅的な戦争があったにもかかわらず、ソ連は海外で忠実な体制を育てるために力を惜しまなかったが、その中には北朝鮮も含まれていた。1949 年末が近づくまで、スターリンは南朝鮮に対する自国支配の拡大を計画していなかった。それとは逆に、彼は南からの侵攻を危惧し、あらゆる手段で北朝鮮指導部による侵攻の企てを潰した¹。

しかしその後、ソ連の指導者の立場は変化し始め、1950 年 4 月、北の南侵を称えた²。このような政策転換は、中国における共産主義革命の勝利やモスクワの原爆製造、ソ連と西側間の関係が全般的に先鋭化したこと、そして同時に、米国の公的な立場の人間がワシントンは朝鮮半島を同国の軍事的責任範囲に入れたい意向である旨を表明したこと（訳註：所謂「アチソン宣言」）によって触発されたのだ。

後になってスターリンは朝鮮半島の戦争で勝利できないと悟った時、彼は 2 つの課題に傾注することになった。第 1 に、同半島上で米ソの直接対決に陥らないようにすること、第 2 に米国が出来るだけ朝鮮戦争に関わり続けるようにすることであった。クレムリンの指導者は、米国人が朝鮮の泥沼に引きずり込まれるほど、社会主義の諸利益にとり国際的環境が好都合になると強調した³。

独裁者の死後、新しいソ連指導部は、直ちに朝鮮半島における戦争の終結を急いだが、それは北朝鮮と韓国間の平和的競争による現状維持政策を目指したものであった⁴。北朝鮮にはソ連から幅広い大河のような大量の経済的、軍事的援助が流れた。ところが、1960 年代初頭にかけて、モスクワと平壤の関係にはイデオロギー的、政治的な対立が生じた。ソ連の指導者 N. フルシチョフは、当時の北京や平壤を虜にしていた左翼日和見主義的な熱狂 (ливацкая лихорадка) が極東を戦火に導く可能性を恐れたのである⁵。次の指導者

¹ Наталья Баржанова. Самая загадочная война XX столетия // Новое время. 1996. №6. С.30.

² Там же. С.31.

³ See Natalia Bazhanova, "Assessing the Conclusion and Outcome of the Korean War", a paper delivered at the conference on the Korean War, Washington D.C., July 24-25, 1995, p.7.

⁴ Ibid., pp.8-10.

⁵ Хрущев Н. С. Мемуалы. Москва: «Международная отношения». 1991. С.342-345.

L. ブレジネフは、北朝鮮を自陣営に引き戻そうとした。北朝鮮は米国と地球規模で対決する上で、極東における要塞としての戦略的同盟国であると見なされたのだ。モスクワは金日成の「チュチェ」政策（訳注：「主体思想」のこと）や「個人崇拜」に否定的な感情を抱いていたにもかかわらず、北朝鮮を援助し、韓国を無視し続けた。

1985年にM. ゴルバチョフが政権の座に就いた当初、モスクワ—平壤—北京の「3極」枠組み内における相互関係に変化はもたらされなかった。ゴルバチョフは、ソ連との距離を保とうとしていた北朝鮮を含めて、全ての共産主義国家との協力関係の強化に向けて真摯に努めた。1985-86年の間、ソ朝関係はより温かい、密接なものになった。しかし、前向きな関係は長く続かなかった。すでに1987年の段階で、外交利益上の相違やソ連におけるイデオロギーと内政事情の進展が、両国間に摩擦を起こさせた。ソ連からの援助量が激減したことやソ連のマスコミによる北朝鮮非難は、状況を悪化させた。とりわけ、モスクワとソウルの関係レベルが向上したことは、平壤の怒りを買った。北朝鮮政府は1990年のソ連と韓国間の外交関係樹立について、「裏切り者の下劣極まる（омерзительный）、不快で（тошнотворный）屈辱的な（позорный）行動」であると特徴づけた⁶。

2. 脱ソビエト・ロシアの対朝鮮半島政策の展開

ソ連崩壊後、脱ソビエト・ロシアの民主主義政府は、西側および他の安定的、且つ穏健で経済的に発展した諸国家との協力関係を目指し、対外政策の転換を図った⁷。同政策においては、韓国に大変重要な位置づけが与えられた。ロシアは天然資源およびソビエト時代から残された宇宙・軍事技術と引き替えに、韓国からの借款や民間投資を期待した。モスクワの政治構想では、韓国を通じアジア太平洋地域におけるロシアの立場を強化することが考えられていた。とりわけ旧ソ連領内に居住する60万人の朝鮮人については、ロシアと韓国間で人道的関係の発展が急速に促された。

当初、ロシアと韓国の関係はまさに特異な状況下に置かれていた。つまり、両国は自己以上に相手の成功を高く評価しながら、相互に強い共感を覚えていた。しかしながら、次第にユーフォリアは消えていった。両国間では経済的な相互要求がぶつかり合うようになった。さらに、ソウルは1961年条約上の平壤に対する軍事的義務を放棄させようとモスクワに圧力をかけ過ぎた。他にも諸々の対立が生じた。

それにもかかわらず、全体としてみれば、ロシアと韓国間の協調関係は、うまく展開し続けた。モスクワとソウル間の対立など、露朝間で分裂が深まっている中では微々たるものであった。ひびの入った露朝関係は、すでにゴルバチョフ時代末期におけるロシアでの権力交代後に危機のピークに達した。ロシアの民主主義者たちは、平壤のスターリン体制を軽蔑視する以外なかった。ロシアは国際社会や将来的に統一された朝鮮の民主主義的指導者たちから笑われたいためにも、墮落し国際的に見捨てられた者からは出来るだけ距離をとり続けなければならないという議論が前面に出てきた。クレムリンは、南北朝鮮関係における平壤の対立的な態度に憤っていた。そして北朝鮮との軍事協力関係を中止する決定がなされ、スターリン体制に対する経済的援助も打ち切られたのである。

ロシアの変化やモスクワが名目上の同盟国への援助を拒んだことは、北朝鮮指導部に単なる衝撃を与えただけではなかった。平壤は、ロシアの反共産主義者たちがソウル、ワシ

⁶ See, E. Bazhanov and N. Bazhanova, "Soviet Views on North Korea", *Asian Survey*, Vol. XXXI, No. 12, 1991, pp. 1123-1138.

⁷ Бажанов Е. П. Актуальные проблемы международных отношений. Т.1. Москва: «Научная книга». 2001. С.259.

ントンおよび東京と共謀し、朝鮮の土地から「社会主義」を一掃する方向で団結することを恐れるようになった。平壤の嫌悪感、特にロシアからの援助打ち切りによって、北朝鮮経済が壊滅的状況になったことで強まった。

1993年には、北朝鮮が核不拡散条約における規定の遵守を拒否したことにより、モスクワと平壤の危機的な関係はさらに悪化した。ロシア政府が国際社会による制裁を支持する方向で圧力と脅しをかけたことへの対抗措置として、北朝鮮は日本海上に50マイルの軍事区域を設けると宣言したが、それはモスクワの利益を脅かすものであり、「同盟国」間には軍事衝突の危険性が生まれるようになった。両国間の摩擦は、一連の他の重要な諸問題をめぐり尖鋭化した。

しかしながら、1990年代半ばにかけて、状況に変化が見られ始めた。ロシアの諸改革は空回りし始め、改革の旗手である民主主義者たちは国内で支持を失ったのである。ロシアの権力構造の中では、当初から政府の親西側的外交路線に疑念を抱いていたより保守的な勢力が優勢となった。ロシア人の大多数も同様に、1990年代半ばにかけて西側のパートナーたちに失望することになった。モスクワでは外交路線を修正し、とりわけアジアや他の大陸におけるソ連の旧同盟諸国や追随者たちとの関係を回復させようとする勢力が出てきた。北朝鮮との関係についても、正常化することが合理的であると認識された。しかし、実際のところ、このプロセスは次期大統領のV. プーチン政権下でようやく始まることになった。

3. プーチン大統領の対外戦略における朝鮮の位置付け

2000年に権力の座に就くや否や、プーチンは、エリツィン時代末期のロシア外交の中で頭をもたげ始めていた傾向を強化した。新大統領は、多面的でバランス化された対外戦略を宣言した。それが意味するものは、ロシアに敵はなく、ロシアは世界の大多数の国々、特に隣国と協調することが可能であり、またそうしなければならないということであった。つまり、そうすることでモスクワは、あれやこれやの国に「傾斜」すべきではなく、地理的条件や規模、国力、歴史などを鑑みれば、ロシアは（恐らくCIS諸国を例外として）同盟諸国を求めずに、西方、東方および南方とバランスのとれた関係を維持しなければならないのだ。2001年9月11日の米国に対するテロ攻撃は、上記の外交路線を遂行するモスクワの決意をさらに固くさせた。そして、イラク戦争がロシアをこの路線から逸脱させることはなかった⁸。

プーチンの対外戦略上、アジア太平洋地域は西側同様の重要性をもっている。中国、日本に続いて、モスクワが同地域で優先視しているのは朝鮮である。ロシアは対朝鮮政策として、次のような目的を追求している。

1. 緊張の緩和と半島上における新たな戦争の阻止
2. アジア太平洋地域および全世界を惨事に陥れる可能性をもつ大量殺戮兵器の朝鮮半島上での拡散防止
3. ロシアの経済的利益、何よりもまず同連邦東部地域の近代化の為に、朝鮮ファクターを利用すること
4. 朝鮮半島および北東アジア全体において、ロシアの影響力を回復すること

⁸ 詳細については、Бажанов Е. П. Булет ли мир однополюсным? // Обозреватель. 2003. №6. С.28-37.

モスクワが同半島に平和的な参入を図る上で、鍵を握る要素の1つは、ひびの入った北朝鮮との関係を回復することであった。ロシア指導部の観点からすれば、それは平壤がもっと自国の安全保障に安堵できるようにすることであるが、それは北朝鮮がより合理的で、柔軟、かつ建設的な態度で、ソウルやその他の世界と接触することを促すことであろう。諸国間の関係改善は、核問題を含めた国家安全保障分野において、ロシアが平壤の路線に効果的な影響を与える可能性も開くことにもなる。

経済分野に関して、ロシアは韓国との協力関係の結果が僅少であることに、ある程度失望している。北朝鮮に韓国との鉄道網を復活させることを説得し、それをロシア領内まで延長させるアイデアが浮上した。ロシアの経済専門家たちは、そうすることによって、朝鮮半島が手に取るように分かる形で経済的利益をもたらし始めると考えている。ロシアのガス田開発や同ガスの南北朝鮮への輸出プロジェクトについては、将来性が見込まれている。モスクワにしてみれば、北朝鮮は安価な労働力の供給者としてだけでなく、ソ連時代から「焦げ付いている」40億米ドルの債務を徴収しなければならない相手として利害関係を有する。

ロシアが北朝鮮に対する影響力の梃子を失ったことが、ロシアの韓国に対する威信を低下させ、朝鮮半島及び北東アジア全体におけるロシアの立場を総合的に弱めることになったことを考慮しなければならない。ロシアは同地域の政治生活における「重要なプレーヤー」として受け止められなくなったのだ。

モスクワと平壤との現実的な接近は、2000年に始まった。両国は数年間の難しい交渉の末、最終的に新しい条約を締結した。同条約は、ソ連と北朝鮮を軍事同盟にし、時代遅れとなっていた1961年の文書に取って替わるものとなった。新条約によれば、両国は正常な国際関係を維持することに合意している。同条約締結後間もなく、プーチン大統領は北朝鮮を公式訪問(2000年7月19-20日)したが、このような訪問は2国間の歴史上初めてのことであった。ロシアの指導者を北朝鮮に招待したことは、金正日の国際問題に対する路線変更の表れであった。その時、北朝鮮の指導者は、外界に対し自らの「隠者の王国」を僅かながら開く決意をしたのであった。

北朝鮮は、より一層切実に「冷戦」の克服を必要としていた。同国は開放政策と国内改革をなくして克服し得ない慢性的な経済・社会危機に絶望的なほど陥っていた。韓国との接近は、北朝鮮に資金や技術、商品を手に入れる可能性を与えた。このような接近は、北朝鮮が米国側から外交承認や様々な譲歩を得ることを助け、西側全体と日本から大規模な援助を呼び込むことにもなる。朝鮮半島情勢の正常化は、北朝鮮の安全保障を強化するために必要であった。正常化を促進することは、北朝鮮の経済的弱さや、ワシントン及びその極東における同盟諸国の戦争準備がエスカレートしたことにより、一層難しくなった。金正日体制にとり、南北朝鮮間の関係緩和は、内政上重要であった。この指導者は、権力の座にいる間、国民のために殆ど何も出来なかった。困難の深刻度が増すなか、指導者が何もイニシアティブを発揮しなかったことは、北朝鮮社会で不満を募らせていたのだ。

金正日の決断は対外政策を活発化させたが、韓国大統領の平壤訪問は国内をすぐに沸き立たせた。当時の北朝鮮では、長らく忘れられていた希望と楽観の念が表れた。指導者が中国への最初の外遊を果たし、日本とのハイレベルでの対話を解禁させたことにより、期待感は更に高まった。全体として、金正日は、韓国と本当に関係を改善し、同国を通じて西側との正常で強固な関係を築き、同時に中国やロシアとの協調関係を強化することでバランスを取ることを目指していたと考えることには根拠がある。

プーチンの北朝鮮訪問中、両国は過去における相互要求を置き去り、前に進むという決

意を表明した。彼らは、ロシア東部地区と繋がる南北朝鮮の鉄道を復旧させることに重点を置きながら、実務的な分野で協力関係を発展させることで合意した。モスクワは南北対話の継続に関心を有しており、必要であれば同対話を促進する役割を担う用意があることを強調した。

平壤での会談の成果は、2001年8月には金正日がロシアへ答礼訪問したことによって揺るぎなきものになった。ロシア社会は、北朝鮮の独裁者が装甲列車に乗ってロシア国内を移動した際の完全な秘密性や他の尋常でない現象に不快なまでに驚いたが、同訪問は諸々の具体的な結果をもたらした。最も重要であったのは、北朝鮮のミサイル計画が平和的性格を有するものであり、2003年までミサイル実験を凍結することを金正日が確認したことであった⁹。その時点で、北朝鮮が無条件に核兵器不拡散条約を遵守することは自明であった。ワシントンとの交渉が難航していた1972年ABM条約の継続について、北朝鮮側がちょうど良いタイミングで支持する旨表明したことは、モスクワに都合が良かった。

北朝鮮との対話を活性化させる一方、ロシアはそれと並行して韓国との協力関係に関心を向けた。モスクワは、金大中の「太陽」政策を支持する旨を繰り返し表明し、南北朝鮮にロシアを加えた3国による経済協力関係を積極的に推進するようソウルを焚き付けた。当時クレムリンは、南北間において互いのメッセージを運んだり、金正日が韓国に答礼訪問することを裏付けたりしながら、仲介者の役割を果たすようになった。

2001年2月26-28日、プーチン大統領が金大中・韓国大統領と会談した際、金大中は、金正日同様、1972年ABM条約に関するロシアの立場を支持することを明らかにした。ロシアと韓国の関係上、最も重要な傾向の1つは、軍高官レベルの訪問や合同演習、協議、武器供与、軍アカデミーでの研修などの軍事協力である。

モスクワが粘り強く後押しした結果、南北朝鮮は朝鮮半島縦断鉄道の復旧に向けた作業に着手し始めた。その他、イルクーツク州コヴィクタ鉱床でのガス開発や同ガスの輸送を含め、ソウルや平壤との多面的な経済協力プロジェクトについて、より具体的な話し合いがもたれた。

4. 朝鮮における核問題と正常化の方法

しかしながら、最近、これらの計画やプロジェクトは、核問題によって米朝関係が尖鋭化したことにより、脇に追いやられている。事実上、極東だけでなく、全世界の平和と安全にとり重大な結果をもたらす可能性を孕んだ危機が発生したのだ。筆者の考えでは、この危機の責任は、平壤とワシントンの双方にある。2002年10月に北朝鮮の代表がケリー米国務次官補と会談した際に、前者が軍事目的で核爆弾を所有する権利を仄めかしたことについては、十分な理由があった。米国が非常に力の入った反北朝鮮キャンペーンを展開し、1994年合意上の義務を果たすことを拒んだからである。米国のイラク侵攻という状況下で、これらの行動は金正日を怯えさせた。彼の目には米国の次の標的が北朝鮮であると映った。恐らく平壤はパニック状態に陥り、核不拡散条約からの脱退やIAEA査察団の追放、北朝鮮がすでに核兵器を所有している旨を仄めかすなど、愚かで、挑発的な道を歩み始めたのだ。

ロシアは、北朝鮮が実際に核爆弾を所有しているという証拠を持っていない。しかし、いずれにしても、モスクワは朝鮮半島上にその様な兵器が現れることに断固として反対であるのみならず、この問題に関して虚勢を張ることや、まして不拡散条約からの脱退につ

⁹ Дипломатический вестник. 2001. август. С.58-59.

いても反対している。危機は即刻解決されなければならない。まさにその為に、モスクワは多国間協議の開始を促すように最大限の努力を続けたが、その目的は、はっきりとしている。北朝鮮は核問題の濫用を二度としてはならない一方、米国は北朝鮮の安全保障に保証を与えなければならない。対立国同士がお互いに信用しない以上、ロシア、中国、日本および韓国は、平壤とワシントンによる双務的な義務の遵守を保証することに何らかの形で賛成しなければならない。ロシアは、朝鮮半島上で平和と安定が確保されるのであれば、あらゆる選択肢に合意するだろう。

将来の展望は、多くの点で米国に左右されよう。もし米国が朝鮮半島における核問題の正常化にひたすら関心があるのであれば、この課題は解決し得る。しかしながら、北朝鮮のような体制に対する非寛容的な風潮が、米国に存在することは明らかである。この様な風潮の担い手たちは、北朝鮮がすでに 50 年以上、他の如何なる敵よりも長期にわたり、米国に対して諸問題を起こしており、また同時に自国民を虐待していると主張する。彼らはこれらのことに終止符を打つべき時機であると考え、力と「窒息させる」方法による朝鮮問題の解決を想定している。

力でということは、北朝鮮に(イラクで起きたような形で)武力干渉するということだ。ロシアの観点からすれば、その様なやり方は受け入れられない。

その理由として、第 1 に、ロシアは自国にとって北朝鮮が直接的な脅威であるとは見なしていないからである。モスクワは北朝鮮の指導者をとり立てて好んだことも、尊敬したことも全くないが、常に北朝鮮のことを、貧困で、弱く、おどおどした国家であると理解してきた。ロシアにおいて、果たして、北朝鮮がミサイルもしくは何か他の手段で自国を攻撃してくることを懸念するような人物を探し出すことができるであろうか。ロシア人のこの様な考え方は、日本人や米国人とは異なっている。

第 2 に、ロシアの軍事・政治指導者層や一般市民は、北朝鮮にどこかの国を攻撃する能力があるとは信じていない。平壤にとり、韓国もしくは日本(米国については言うまでもなく)に対して攻撃を開始することは、自殺に等しい。そして北朝鮮の指導者は、多くの欠点があるにもかかわらず、自殺しようとするような狂信者には見えない。金正日は、変革が自分の体制の崩壊を引き起こすことを懸念し、国内改革さえ中止するほど、かなりの臆病者である。強力な敵国たちと戦争をすることは、地上からこの体制を葬り去るだけである。ならば、何のために独裁者は火遊びをするのであろうか。

第 3 に、北朝鮮に対する軍事行動は、制御しにくい予測不能な事態の発展を触発することになる。諸大国の参入による大規模戦争の可能性さえ排除できない。理論的には迅速かつ容易であるはずの作戦行動が、初めのうちは当該の対立に何の関係も有していなかった者までを含め、全ての者にとり破局を導くことは、歴史上枚挙に暇がない。

第 4 に、北朝鮮への攻撃は、国際法に矛盾することになり、全世界の安全保障を損なうことになる。外部からの軍事侵攻から自国を守る如何なる国際的機関や規範も存在しないということになり、つまり警告を発する機能が弱められてしまうのだ。弱小国にとり、大量殺戮兵器を所有することによって、潜在的な攻撃者を抑止する誘惑が強まることになる。まさに今日の平壤がそれに当てはまる。強力で野心的な国々は、敵に対し武力を行使することが正常かつ自然であると決め込んでいる。米国の例は、東・南アジアや中東、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の間に広がりつつある。

第 5 に、戦争が多数の犠牲者を出すという点が非常に重要である。単にどこかの誰かが力づくで幸福を朝鮮にもたらそうと欲するが為に、数万人の罪無き人々が殲滅させられるであろう。

朝鮮問題を解決する上で、米国が抱く第2の手段である「窒息させる」方法も、ロシアは是認することが出来ない。この方法が意味するところは、孤立化や制裁、隔離などの手段により北朝鮮の体制を内部から崩壊させようとする事である。世界には、恐らく金正日よりも悪い統治者がいる国が少なからずあることを考えなければならない。米国はそれでもその様な国々と正常な形で接触しているのだ。つまり、ロシアは全体主義性や経済的後進性だけの理由のために、北朝鮮がその様な無慈悲なやり方に値するとは考えない。また、北朝鮮を「窒息させる」方法は、非人道的であることも考慮するべきだ。北朝鮮国民を共産主義の暴君から解放するという名目の為に、飢餓で同国民を苦しめてはならない。国家の権力者たちは何とかして食べられるだろうが、その苦しみの負担は基本的にまたしても普通の人々の上にのし掛かってくるのだ。

しかも、「窒息させる」戦略が、求めている結果を達成できるという保証はない。平壤が核能力の開発を含めた軍事分野での努力を倍増しているように、まさにそのような事態が既に起きている。歴史の教訓を思い起こそう。1980年代末、北朝鮮が戦略的同盟国であるソ連を失い始め、同時にソウルやワシントンから高まる圧力を感じ出した時、同国は核兵器開発を決意した。北朝鮮指導部の立場からすれば、それは外部からの干渉や体制の崩壊を阻止する唯一の手段であった。今日、「窒息させる」試みへの対応は、無慈悲で、被害妄想的なものにさえなるだろう。確かに、米国のイラクに対する武力干渉の結果として、北朝鮮に対する海からの直接的な脅威はすでに生じている。

言うまでもなく、「窒息させる」戦略がうまく行くかも知れない。北朝鮮体制は、最終的に、崩壊する。平壤が国民のコントロールを次第に失い、犯罪と汚職が急増し広がりつつある反体制集団の側からの権力批判が、より一層公然となった時、全てが始まる。その後で、さらにどのようにして先に進むべきかをめぐり、各地で自然発生的な暴動や権力集団間のいがみ合いが続くであろう。これらのことは全て、ソ連や東欧における他の共産主義諸国家の崩壊時に生じたことである。

北朝鮮の場合における特異性は、直ちに韓国が情勢介入してくることだろう。38度線では相互交流が始まる。北朝鮮の諸々の組織によって韓国の政府や国民、様々な政治的・社会的集団への呼びかけが行われよう。韓国の人たちは、それに応じて、北朝鮮の反体制主義者たちや、苦しむ人々を助けようとする。その結果、北朝鮮ではさらに状況が複雑化するであろう。共産主義指導者たちは、自らの生活が脅かされることを恐れ、国内の変化を遅らせるか、もしくはストップさせようとしてくるだろう。彼らは韓国の過激左翼分子から支持または少なくともシンパシーを呼び起こすことが出来る。朝鮮半島の様々な地域で衝突が生じよう。

以上のような形で事態が進展すれば、最終的に体制は崩壊する。そうなれば、数十年にわたってイデオロギー的、政治的、社会的、経済的な条件が完全に異なった2国が1つの国に合併するという、朝鮮の歴史上、新しくも大変痛ましい章が始まる。突然で準備が出来ていない統一は、韓国の経済的、政治的危機を導く。新たな国家に北朝鮮の軍事エリートを統合することは、最も困難な問題となる。数百万の一般の北朝鮮国民にとって、競争的な資本主義的環境の生活に適合することは困難であろう。多くの者たちは、彼らが仕事や一定の社会的地位を有していた共産主義時代にノスタルジアを感じるようになる。韓国人の間には、巨額な費用が国の北部を近代化する上で必要な為に、彼らの生活水準が低下することへの不満が広がるだろう。統一された朝鮮は、長期的な危機的期間に入り、同地域全体の発展と安定にとり障害となる。

ロシアの観点からすれば、最も賢明で、最も痛みの少ない形で朝鮮半島を正常化するに

は、まず初めに韓国と北朝鮮の間において真に平和的な状態を築き、北が南および他の世界との接触を増やし、経済と社会の段階的ながらも奥深い改革を進めるように促さなければならない。平壤は、もし脅かされず、公的な屈辱に晒されることもなく、誰も北朝鮮の体制を外部から力づくで崩壊させようとしないうことを本当に信じる事が出来れば、事実上 2001-2002 年に始まった路線に回帰するだろう。

モスクワは米国の平壤に対する態度が柔軟化することを歓迎する。モスクワ自身、北朝鮮に対する影響力を有し、世界地図上に繁栄した強力な統一朝鮮国家が出現することに真の利益を見出す以上、朝鮮半島の和解に貢献するであろう。今回および以後全ての段階において、正常化プロセスにロシアが参加することは、平壤が自国の力についての自信を強化し、敵国からの現実的脅威や想像上の脅威に対する懸念を和らげることになるのは言うまでもない。その結果、北朝鮮は交渉のテーブルにおいて、より賢明で柔軟になるだろう。ロシアとしても、既述したような鉄道やエネルギー供給分野のプロジェクトを実現することによって、南北朝鮮間の経済協力を促進することが出来よう。

統一された朝鮮におけるロシアの関心事項は、以下の諸状況によって条件付けられよう。

1. 極東において統一朝鮮という新しい強力なプレーヤーが出現することは、ロシアにとり同国との論争問題がない以上、ロシアの地域的な政治的立場を強化することになる。
2. 朝鮮の長期的な平和は、ロシアの後進的な東部地域の発展や、同地域への外国投資を誘致する上での環境整備となる。
3. ロシアは、シベリアや極東のロシア沿岸地帯の近代化に朝鮮の間接的な参加を期待することが出来る。
4. 朝鮮半島の正常化は、ロシア、日本、中国および朝鮮の参加による北東アジア安全保障システムの形成に向けた可能性を開く。そのようなシステムは、同地域の平和と安全の為に絶対不可欠である。

朝鮮半島の正常化におけるモスクワの役割を評価するに当たっては、ロシアのこの半島に対する野心は限られており、昔のロシアと違ってヘゲモニーを目指したり、同半島への影響力をめぐる諸大国との政治的闘争に引き込まれる用意がないことも考慮すべきである。それどころか、モスクワは朝鮮や同地域全体における広範な国際協力を支持している。

ロシアの対朝鮮政策が、韓国や日本の安全保障上の根本的な利益に適っていることに留意することは重要である。ロシア連邦は北朝鮮に軍事援助を行っておらず、後者の軍事的能力の増大に反対する一方、上述の通り、北朝鮮が核能力を開発する試みにも断固として反対している。モスクワは、軍事衝突が発生する可能性を孕むような平壤によるあらゆる意図を、最も積極的に阻止するであろう。ロシアはこれら全てのことと同時に、韓国との軍事関係を発展させ、韓国に武器を輸出している。

5. 朝鮮正常化の諸段階

私見ではあるが、もし現在の核危機を克服し得たとして、朝鮮の正常化はどのような段階を経ることになるのであろうか。

まず何よりも、北朝鮮が安全保障や国際的な承認を強く感じ取ることが出来るように援助しなければならない。その為には、米国や日本が北朝鮮と外交関係を樹立することが不可欠である。次に善意のジェスチャーとして、ソウルとワシントンが、韓国における軍事態勢のレベルを下げるという考え方もあろう。さらに、北朝鮮との充実した経済協力関係

を発展させる機会が訪れるに違いない。

もちろん、これらの手段の全てもしくは大多数が逆効果となる可能性はある。上記のような段階は、北朝鮮のスターリン体制を強化し、その更なる存続を助長するだけであると、筆者の見解に対して反論することは可能である。だが、筆者はそう思わない。それとは逆に、ソウルや国際社会の側から平壤に対して友好的に接近することは、この体制の変革に向けた門を開くことになろう。北朝鮮の上層部における改革志向の活動家たちは、同国の変化に向けた説得力ある論拠を得ることになる。保守主義者たちは、改革に反対することが一層困難になろう。

正常化の第2段階では、南北朝鮮関係における強固なインフラの形成という課題が出てこよう。この課題は、北朝鮮と韓国および米国や日本を含めた他の国々との経済協力のスケールを拡大することになろう。平壤の伝統的な敵国に対する信頼それ自体が高まることになり、同時に北朝鮮内部の変化を速めることになる。北朝鮮経済は韓国の水準に向けて引き上げられ始め、構造上、もっと後者と相容れるようになり、統一への準備が進むことになろう。北朝鮮経済が強くなればなるほど、両国統一後に韓国にとっての「重荷」が軽くなることは明らかである。

文化的交流は経済交流と並んで拡大するが、その後には軍事交流の問題が出てこよう。その結果、北と南は公式な外交関係を樹立し、平和条約を締結して、国際舞台において政治分野で協力し始めるだろう。

北朝鮮が本質的に変化する時、正常化を完了する第4段階に移行することになろう。同国には十分に発達した混合経済が成立し、相対的に開かれた政治・軍事システムが形成されなければならない。改革志向で責任ある予測可能な政府が権力を握るであろう。北朝鮮経済は比較的規模が小さく、効率的で安価な労働力を有し、天然資源や発達した産業インフラが豊富であることを考えれば、北朝鮮はシステムを自由化すれば早期に経済的発展を達成するかも知れない。

上述した諸々の進歩が北朝鮮で見られるようになってから、南北朝鮮の合併についての真剣な交渉がようやく始まることになろう。恐らく、最初は国家連合（конфедерация）となり、その後でのみ統一国家へと進むであろう。上記のシナリオにおいて、統一のプロセスは多くの年月を要するが、その代わり、比較的スムーズであり、最終的に成功するであろう。

北朝鮮が自国にとって新しい経済的、政治的、社会的現実に溶け込まなければならない転換期に、まさにロシアが非常に有益なパートナーとなることが出来よう。とりわけ統一後の北朝鮮では多くの企業が適格性を失い、停止してしまうことは明らかである。それらの企業の大多数はソ連によって建設されていた為、ロシアにはそれらを近代化する能力がある。そして近代化された企業は、まさにロシアの販売市場向けに照準を合わせるだろう。その上、ロシアは、恐らく、北朝鮮の経済メカニズムの立て直しによって職を失う大量の労働者を吸収することを望む唯一の国家となろう。数百万人の北朝鮮人への就職斡旋が必要となるが、ロシア極東は彼らの多くを受け入れることが出来る。北朝鮮にとり、ロシアは石油、ガス、電力（北朝鮮に支払い手段がないため、現在はない）を最も安価で有益なかたちで提供しうる輸出国となるだろう。

モスクワは次のような援助を行うことも出来よう。

- 朝鮮からロシア連邦の東部地区を抜けてヨーロッパに至る輸送量増加に向けた鉄道の整備と発展
- 北朝鮮の地質調査作業（ロシアは1950-1960年代に収集した北朝鮮についての大

量の地質調査データを有している)

- － 北朝鮮労働者の再教育
- － 北朝鮮出身学生の教育
- － 北朝鮮の軍事力の近代化
- － 北朝鮮の農業製品の輸入
- － 特別経済ゾーンの開発

恐らく、南北朝鮮の平和的・段階的合併のシナリオは、実現することが非常に難しいだろう。殆ど不可能だ。しかし、ロシア側はこの方向で努力する必要がある。

2003年8月19日

(ロシア語から伊藤庄一訳)